



〈研究〉再び大西教授の経済學業績を顧みる

高島, 佐一郎

(Citation)

経済學商業學國民經濟雜誌, 38(4):690-698

(Issue Date)

1925-04

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053745>



再び大西教授の經濟學業績を顧みる

高 島 佐 一 郎

同君と因縁あさからぬ小樽啓明會同人は、彼れの三週年にあたり三つの假間を設けて彼れの追憶・業績・將來に就いて私どもの所見を徴されたのです。この小文はそれに答へたものに若干の改修を施したものにすぎませぬ。けれども、彼れの小論文集の刊行近きにあることが期待されてゐる折柄、曾つて故教授の言説に親まれましたでせう所の本誌讀者諸卿へ、其れを贈りたいと思ひます。

一

ほんとうにあれから根雪が三たび融けて、融けた大地からは若草が三たび緑りにもえて自然をいろどりしました、けれども、小樽の否なわが經濟學の文化の花床を一たびは濃く彩られた故大西教授からは、再び精神文化の「五月の季節」がよみがへり來ないのでせうか？ 明らかに、肯定の言葉で、しばらくウオルター・スコットのことばを藉りるなら、「まだまだ彼れは立派に生きてゐる！」
Et.....cette bête-là est vivante,.....」こゝふやうな言葉で、それに答へ得られることは、まさしく、私ども彼の友達の悦び慰めであらねばなりません。それは現に、啓明會同人の美はしき友情乃至は敬慕の情の表現である。斯かる催し自體の亦た論證するところなのです。けれど、事實は、

それよりも遙かに遙かに大きく廣く甦へり居り、現に深く精神的活動をされてゐるのであります。これを短く例證しませうなら、をこがましい儀ですけれども此のはど復活せしめた私の一著作中に、(改訂増補金融經濟の諸問題)彼れの業績にかゝはる舊稿の一部分を採録しましたところが、讀者の或る人々は、其の一小篇よりして、彼れの論策に對する新たな敬慕感激の泉を見いだしたと言ふてくれましたので。否な、斯くわざわざ私の筆を通して彼の「生動のすがた」を描く必要は毛頭ないのであります。これは彼れ自身が明白に語つてゐるところなのです、その主著『囚はれたる經濟學』及び傍著『伊太利亞の旅』自體が、いまだに、相當多數な讀者を惹きつけてゐるのでありますから。――

二

「十分なる生動」。その業績にかゝはつて三年前に私が用ゐた此の語の眞實さを傳へるため暫く、他の角度から、この事を眺めてみませう。私は當地で、得がたき心の一友を惠まれてゐるのであります、――その友と申すのは今、獨逸で故兄が歩んだのとは、同じ道を遡うてリツカアト、フツサアル、シユタムラアの思想に沈潜してゐるA君を指すのです。――彼れが二年前、故兄と同じ病を得ましたとき、「二月八日、大西教授の命日三首」と題して其のよめる詠草をたゞつてみますでせう。

こそこの今日われと病を同じくしゆきてし鬼才――目を閉ちて想ふ

天馬ゆく思ひにたけし才人の故ゑにし病神のねたみてしやも

凡庸のわれゆゑ神のあはれむか熱や下り今日こゝろよし

このF博士門下の一逸足の歌の心、またこれを引いた私の心、それをたゞたゞしく説く要はないでせう。けだし、それは、往年『伊太利亞の旅』のお話を聴きながら北海ホテルの夕を短しとせられた同人の懷ろに、おのづと滲みいるところなのに相異ありませぬから。……たゞ平凡に一語しませうなら、彼れの思想の高所から流れ下つた奔湍は、恐らく次ぎ次ぎに又た遠く遠く此れら後とより來れる高材のこゝろごころを感激させる、さうして謂ゆる思想連續乃至は繼承の理法に従うて、まだまだ長く彼れの業績を若返らせ擴充させてゆくのに相異ありませぬ、との心であります。

三

さて、假問せられた「その學問上の功績」については、前文にしたゝめた拙文のなかで、私の考へは可なり盡されてゐます。たゞ此處で一言すべきは、彼れの發表せられた經濟學方法論乃至は經濟學思想史論上の業績を批判するのには、今日達成せられた斯學の立場又は態度よりして試みられてはならぬ、言ひ更へるなら五年前の我が斯學の立場よりして、又は當年の經濟學・社會思想の態度よりして爲されねばならぬ、と云ふことでありませう。かく解しますなら、斯界に於ける開拓者の一人としての彼れの功績は、ながく感謝せらるべきものであらねばなりません。で、今はその二の間ひ「追憶の一二」へ進むことにいたします。

まづ、神戸のT博士の推舉で今度S博士の指導室にはいつて來たやつはすごいぞ、と同學の連中を張目せしめた頃の追憶は、凡そ十五年前に溯つてのことであります。ラッサーレに「獅子の爪」

を見、さうしてマルクスに「冷かに閃く蛇の目」を見たとは、曾つてメーリングの評した言葉と覺えますが、此の闘搏力と此の理智力とは勿論、遙かにより小規模なものでしたらうけれども、私どもが、既に當年の彼れの意志力・頭腦力において、雙方共に之を見いだしたところのものでした。しかし、その獅子の爪と蛇の目とは、一橋二年の學窓にては深くもどうかいせられ、却つて彼れは専らその自らの衷ちを養はれたやうでした。

しかも、それらが小樽に赴かれてから、時に應うて謂はば小出しに發揮せられたとは、私たち東京に居つたもののまゝ、傳承したところなのでした。この強さ鋭さといふものが漸く全體としての圓熟さのなかに鍊入せられ渾然とした一人格を成し來られたのは、雪の獨逸から霧の英國へ、更らに流水の美しい佛蘭西を経て淺藍の海と空とに恵まれた伊太利亞へと云ふ幾巡歷を重ねるのに從うて、層々にその著しさを加へたやうに見えます。それは、世界とどこどこから受取られた、彼れよりの信書が有力に證據だてゝゐたのです。實際、ウイスコンシンの水都マディソンに迎へられた彼れは、私には、殆んど全く別人として映つたのでした。さうして宵を徹して語りあひ、どうどう隣りの家から電話で抗議を申込まれて初めて寢についたのが夜も自らむ頃だつたのは、今もなほ思ひ深い記憶になつてゐます。やがて、私どもが屋を隣つて住うた小樽二年間のところよき友交の追憶こそは、終生忘れることの出来ぬもの、一つであります。

四

Sein Werk bleibt Torso! 彼れの業績は、さながらトルゾと看らるべきものでせう。彼れは實に、學の一方性 *Einsichtigkeit* と云ふ概念を大きな指南車となしつゝ、經濟學思潮の推移發展を極めて巧みに、ダイアレクタイシに描き出されましたけれども、その研究對象自體が一層鮮明に辨證法的に展開し來つたところの經濟生活の歴史の研究をもつて、其れを基礎づけることなく、更にその到達し得た現代經濟生活の理法を組織することなしにあはたしくゆかれたのです。でありますから、グキルブランドがマルクスの業績を評した右の言葉は、故兄の場合に移されて一層よく當てはまるものといはねばならず、一層直截にいひませうなら、寧ろラッサールの生涯・事業の方に似てゐるものでありませう。さうして、人々の彼れを愛惜してをかぬ事情の一つは、まさしく此の間の消息にも横たはつてゐるのではないでせうか。

しかし、よし手足のない胴體の寫像でありませうとも、彼れの學問殊に經濟學業績における將來、少くともその近い將來は、之を忖度することが不可能ではありませぬ。何故とやら、彼れは可なり歴史哲學に通じ經濟史を攻め又た論理家でありましたけれど、之を經濟純理構成の補助手段たらしめた場合には、歴史史實の多様性からして自からの頭で、よくその一様性だけを描き出し、之を辨證法的に考察し表現し得るの強みと傾向をもつて居られたのですから。——一言で之を表はせば、この構想表現について、彼れは高度にリカルドウ的なのでしたから。——かやうに既に、リカルド

ウ的ならば、他日組織さるべかりし其の經濟學構成は恐らく、——しばらく既成學派の分派に従うていへば、——新歴史派からは益々はなれ、却つて新正統派へ愈々近づきゆくものであつたでせう。この點はまた恐らく、F博士の立場よりも一層、ネオ・クラシッシであつたでもありません。

五

その經濟純理研究の將來は凡そ右様であつたであらうこと、致しまして、次いで彼れの社會政策への將來は、いかやうな道を歩まれたことでせうか？ この問ひは必然的なものです。彼れが『囚はれたる經濟學』においては、一言をすら之に費やさず、論壇が社會問題に獨占せらるゝに拘らず、否、輕佻なる勞働問題さへ横行する世なればこそ、(此の種の書物の公刊は)寔に焦眉の要求である」として、社會問題研究を若干輕くあしらつたやうな口吻がありましたとて、爲めに、この問ひを無用なりとなされては謬りです。この五年間に、わが經濟思潮は、否なその思想の母體なる經濟生活の現實は、幾度かの洗禮をうけいれてゐるのですから、彼れ若し在られたなら、その社會政策に對する態度には、もつともつと眞劍味を加へてゐたのに相異ありません。

いま、視角をかへて、彼れが最高級の敬意を捧げて居られた一碩學の最近業に現はれた擲筆の語を藉りまして、之を論證するのは、やがて彼れに敬意を表する所以なりと思ひます、曰ふ、「(經濟生活に現はるゝ)諸般の不調和を除去するに必要な各種の施設を研究するは、經濟政策及び社會政策の任とする所なり。されば經濟原論を學びたるものは、更らに、經濟政策並びに社會政策を學

ばざるべからずと知るべし。」と。さうして之に關する書物の刊行を他日に期せられて居られるのです。(福田博士、『經濟原論』
教科書、大正十四年)之が、さきにこの問題を必然的なりとした次第なのです。けれども、之を詳述するべく、もう、剩された紙數と時間とがありませぬ。

この故に、輓近、社會政策が主にも、對抗せんとするマルキシズムの、又はそれに關かはる有名な言葉を藉りまして、之を片付ける戰術をとるほか今は致し方がありません。然らば、社會に對する哲學の任務を彼れマルクスはいかやうに考へましたか、又た經濟生活の發達と社會生活一般の進展との關係を彼れマルクスはいかやうに考へましたか。その一については、その Die Philosophen haben die Welt nur verschieden interpretiert, es kommt aber darauf an, sie zu verändern. の語が代表的なものでありますし、その二については、Die Produktionsweise des materiellen Lebens bedingt den sozialen, politischen und geistigen Lebensprozess überhaupt. がその全思想の指南車とせられてゐます。で、故兄は、之について抑もいかなの見解をもつて居られたか?それは、明白であつて、殆ど全部的なる否定なのです。

その否定といふた所以は、その一に對してはヘーゲルに従うて彼れが嚴格に、Die Eule der Minerva beginnt erst mit der einbrechenden Dämmerung ihren Flug. の喩を超えまじとなしてゐたからでありますし、その二に對しては、修正されたカントのごとき立場、假りにアドラアの語でいへば、Das Ideelle ohne das Materielle ist wirkungslos, das Materielle ohne das Ideelle ist richtungslos. の考へをもつてゐたからであります。で今、彼れの好まれた表現方法に倣うて之を約

づめて言ひきますなら、その社會進化觀は Revolution の頭文字をもぎとつた evolution で終始せんとするのに在りました。然らばすなはち其處には、「その時代時代の現實を思想で把握した」ところの社會政策論が、彼れの將來の口から、また筆から力強く流れ出たに相異なりますまい。

六

この恐らく社會革命 social revolution を斥けて社會進化 social evolution で行かうとした彼れの志向は、その思想の發展を辿つてみますと、可なり久しいものであるのを見出します。彼れは一橋を出るとすぐ、今は伯林大學に輝いてゐるゾンバルトの『猶太人と近世資本主義』の要領を發表したのでした。かく同じく猶太系から出た卓越した思想に影響されたのに致しましても、彼れがマルクスから益々離れて而してゾンバルトの如きに近づいていつたのは、必ずしも彼れの個性乃至は箇人格から歸納せらるべきではないのです。却つて、彼れがマーシャル流に箇々人の本性の深みを洞察したばかりでなく、ゾンバルトの如くに經濟生活の機構及び作用の現實を直視し凝視した結果である、と看らるべきであります。マックス・ペエアはヘーゲルの論理と信念との矛盾を説いて、曾つて、「その國民的感情が辨證法論者をうち負したのだ」と申しましたが、彼れの場合にあつても、その祖國の國民經濟的使命・要求にかゝる感情・欲求乃至は認識が、大西といふ一辨證法論客を征服しをはつた、といひも得られるでせう。でありますから、ある獨逸學者が近く、ゾンバルトを「水を混ぜたマルクス」と評した其の同じ筆法でゆきますと、彼れ大西教授は、差しあたりまさしく

「水を混せたゾンバルト」となる譯けなのです。さうして、私どもはF博士の謂ゆる國民經濟の現象・作用に現はるゝ「諸般の不調和を除去するに必要な各種の施設を研究する」ところの我が社會政策の研究といふものが、彼れをミッスした甚だ大なるものあるのを、今だに愛惜しいものに思はれますのです。

をはりに、設問の最終のもの、すなはち彼れの將來よりして何を希望したか、が来る筈でありましたが、實は以上をもつて大約、それにも答へ得たと思ひます。しかし、その將來を揣摩するのは、少くとも彼れの性格にとつては無用なではありませんまいか。實際、自から或る機會に引用した「生を知らず何ぞ死を知らんや」を實踐したのが彼れでありましたし、また、現在に強く生きよう、然らばより有力な將來の生命力はおのづと辨證法的に展開されてくるのだ、とヘーゲル流に人生を觀たのが彼れでありましたから。——ですから、この點について、このデアアレクテイツカアを追憶する、この文は、世界の思想史上、最大のデアアレクテイツカアであるところの人の一句を藉りまして、結語たらしめるのを、妥當であると信じます。すなはち、ゲオルグ・ヴェルヘルム・フリイドリヒ・ヘーゲルは曰ふ、「あらゆる將來的のものは絶對的でない」。

(大正十四年二月)